

徳之島諸方言の名詞アクセントの記述的研究

金, 娥璘

<https://hdl.handle.net/2324/4784376>

出版情報 : Kyushu University, 2021, 博士 (文学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏名	金 アリン			
論文名	徳之島諸方言の名詞アクセントの記述的研究			
論文調査委員	主査	九州大学	准教授	青木 博史
	副査	九州大学	教授	川平 敏文
	副査	九州大学	教授	久保 智之
	副査	九州大学	名誉教授	高山 倫明

論文審査の結果の要旨

本論文は、鹿児島県徳之島の、天城、伊仙、徳之島の3町にわたる19地点の集落で行った実地調査をもとに、徳之島諸方言の名詞アクセント体系の記述を第一の目的とし、あわせて、そこから推定される徳之島祖語アクセントから、現在の各方言に至る変遷過程を解明しようとしたものである。

第1章では、徳之島諸方言の音素体系や徳之島の地理的な位置など、本論文の前提知識となる基本的な情報を提示し、第2章では、研究史を批判的に概観する。徳之島諸方言のアクセントについては、天城町の浅間集落の方言を中心に、半世紀以上にわたる研究の蓄積があるが、先行研究では当該諸方言に特徴的に現れる長母音の観察と解釈に問題があり、そのために体系の記述が複雑なものになっていると指摘する。本論文は、詳細な確認調査を行った上で、長母音に、①基底から辞書的に存在するもの、②表層で単純な音声現象として生じているもの、③基底にあるアクセント情報に関係して表層に生じたと解釈されるものの3種類があると結論し、アクセント体系を考える上で重要なものとそうでないものを峻別することで、より簡潔な記述が可能であると主張する。

第3章では、2013年9月から2019年3月にかけて筆者が行った19集落における調査結果をもとに、各集落の共時的な名詞アクセント体系を、一つ一つ丹念に論じていく。全体を概観すると種々の相違点が見られ、多様な様相を呈しているが、いずれも、「モーラを数える単位とし、昇り核を持つ、3型もしくは4型アクセント体系」と分析することが可能で、大きく3つのグループに分類できるといえる。グループの分布に地理的連続性がとくに観察されないことから、その多様性は、各集落が他からほとんど隔絶された状態が長期にわたり、その間にそれぞれが自律的に変化した結果であろうと推定している。

第4章では、第3章の共時的分析に基づいて、徳之島祖語アクセントの体系を推定し、そこから現在の各方言に至る変遷過程を論じている。本論文は、諸方言が経験した可能性のある変化は最大で4種類しかなく、その多様性は、そのうちの何種類を、どの順番で経験したかによると推定する。

第5章で以上を総括し、あわせて、残された課題をいくつか提示して、今後の研究の方向性を示している。

最後に、今後の検証に資するよう、全調査データを資料編として付すが、これは、消滅危機にあるとされる当該方言のデータとしても、貴重なものと言えよう。

本論文は、地道な調査を踏まえた実証的研究の成果であり、今後のさらなる発展も期待される。よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士(文学)の学位を授与されるに十分な能力を持つと認めるものである。